

あを 6

2016





版画 武井石艸

夜の秋の楽器となりし妻のミシン
白き部屋に疲れもち込む雨期の脚
霧へくばる帰省子の半身の白
夏灯一瞬くろく採血の順が来る
炎天にまた逢ひいたく笑へる吾子

堀内一郎

夏霧にブレーキ確かむ登山バス
水ばせうつぎつぎと霧来てふかし
溪越しの飛瀑は無音閑古鳥
雪溪のほのと明るし森の内
そこへ岩魚石赤く透きとほるまで焼き

佐藤喜孝

(昭和 36 年 7 月 水音)

あを

六 月



東京 佐藤 喜孝

昭和の日

をぢさんはみな遊び人
蛸蛸の紐
春曉や白が好きだと紅が云ひ
老人の直立難し
昭和の日
原發や火の神
水神風の神
日本からつるりと剥ける地球かな

東京 佐藤 恭子

☆

ふきのたう背をふたつに折るふたり
手首の輪ゴムひとつ貰うて梅の花
春の風邪茶粥におもいつきりの息
体温をたつぷり貰ふマスクかな
鶉のさくらの奥に入りしまま



東京 七郎衛門吉保

春の知らせ

雀 右衛門 襲名口上花に華
地廻りの猫避けるそこ落椿
芽吹き待つ雑木山肌ココア色
雪解風百花のにほひ友にして
初蛙ちよろちよろ川の二重奏

東京 篠田 純子

谷中く西日暮里

白雲木の花いや高くそよぎけり
維新へ向かふ鉄砲穴や春疾風
春昼の仁王の腹の罅浅し
センサーにて竜の口より水涼し
地蔵坂の足許ぐらり花大根



石川 定梶じょう

暮春

草焼いて焼けぼつくひといふ立てり
あたゝかし散髪どの店に行かう
炬燵しまへば潮さみに耳敏し
期日前投票へ行く花曇
鉄棒があるので暮春ぶら下がり

埼玉 須賀 敏子

宮古島

清明の空を南へ宮古島
砂白き与那覇前浜海開
何処までも宮古ブルーの夏始
目を皿に青海亀のぬるらしい
島結ぶ白き橋よりサンセット



埼玉

竹内 弘子

花柘榴

花大根 小火のありたる人だから
そのかみの煙突 男春はやて
佐保姫のもすそのごとく 陽炎へる
われとわが火の粉を被き 花柘榴
柘榴はや堅き朱の燭 かけそむ

東京

田中 藤穂

合格す

榛の花 第二志望に合格す
春深し海より見上ぐ 赤間宮
車椅子の轍いくつも 黄砂降る
甲高き馬の嘶きたんぽぽへ
遠望に春の富士あり 泥の道



石川

中川句寿夫

めかり時

皇紀二千六百年のさくらかな
春の雲ミンチ工場の赤煉瓦
約束の仔猫貫はれ地震のあと
烏の巢賣薬さんが通りけり
握力の左が勝るめかり時

三重

長崎 桂子

蛭烏賊

温暖はお彼岸を意に介しない
純粹な庭に固まる黄水仙
蛭烏賊帰路は夕餉を描きつつ
初蝶や今日も着慣れた衣を洗ふ
春愁を横たへ摩る昼下り



東京 森 理和

あんばん

柿若葉あんばん買って祖母の家
桃色の日射しを浴びる桃源郷
幾種もの囀の中暮れなづむ
のどかさに溶け入るこの身浮遊せり
春の風受話器から叔母飛び出せり

埼玉 山莊 慶子

葱坊主

快晴に黄蝶白蝶湧き立てり
復活祭礼拝堂にジャズを聴く
幼子の蒲公英の絮怖がりて
気がつけば鉢植葱に葱坊主
街路樹の白紅交互花木



埼玉

渡辺 京子

☆

新緑やもっこり柔らか里の山
犬二匹ほんとに虎刈春の風
日輪の月のごとくに春闌けし
米朝に編み目乱され夏近し
命日に赤い胡蝶花届き居り

東京

赤座 典子

ナガミヒナゲシ

宴果て朧の中へ人送る
L I V Eといふ長き録画や昼霞
春の風幼の旋毛大きかり
落花霏々バス停めざす肩車
茜色ナガミヒナゲシ濃く生ゆる



埼玉

秋川

泉

二〇一六年四月に

トンネルの向ふに続く蝮蛇草
異国人混じる茶会や熊谷草
暇乞ひ言ひ出しかねて藤の花
夫と来しメリケン波止場春霞
晩春の火の国異変震度七

山梨

井上 石動

☆

惜春や想ひ出すことみなおぼろ
さはさはと楓若葉や橋の午
巖よりずれたる注連や青嵐
はつ夏の大路や行かん五体もて
山神へ願ふ木遣ぞおん柱

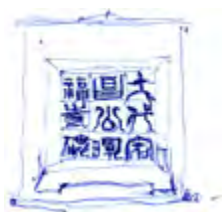


埼玉

大日向幸江

そわそわ

夏帽子おしゃれに被るあの女優
そわそわと孫名乗る男四月尽
筍飯こんもり盛らるおせったい
菊の香にむせてしまひぬ通夜の席
群青の空に向ひし揚ひばり



青空のどこ撰んでもさくらんぼ

佐藤喜孝

春の川渡りて近し母の家

大日向幸江

鴨の群れ水面をすべる寒の声

佐藤恭子

終りなき仮説住ひに春埃

七郎衛門吉保

ミキサー車の緩き回転春愁

篠田純子

だれぬぬ朝の干潟へ忍び入る

定梶じょう

大振りの伊予柑届く兄病むも

須賀敏子

吉日を半ば信じる小鳥の巣

竹内弘子



吊草の揺れて春めく車内かな	田中藤穂
寒雀いつも遅刻の背高き子	中川句寿夫
一帯はうすももいろにうらけし	長崎桂子
浮き島に松の木二本朧月	森理和
惚の芽や太き茎まろやかに苦し	赤座典子
春来り猫に品位を諭す人	秋川泉
惜春や月も中也の月となり	井上石動
かひがひしき夫の酈は子守歌	斉藤裕子

喜孝 抄



まい

五月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

春はあけぼののまへリヒテルの平均率 佐藤 喜孝

私は門外漢なのですが、リヒテルはピアノの名演奏家とのことです。バッハのくり返しの多い曲を、段々昂まる感情的な演奏を、春の夜明け前と取り合わせた句と解釈致しました。

枕草子とロシアのピアノリストの取り合わせた句は、今迄もこの後も類を見ないと思います。

(純子)

下萌を蹴ちらし來たりブルドッグ 大日向 幸江

ブルドッグが、目的物に向かって突進している様が、面白く表現されています。下萌を蹴ちらして行く先には、愛する飼主か、恋のお相手がいるのでしょうか。(純子)

春の川渡りて近し母の家 大日向幸江

一読、蕪村の「春風馬堤曲」を思った。「渡瀬水過馬堤（瀬水を渡り馬堤を過る）偶逢女帰省郷者（偶、女の郷に帰省する者に逢う）」と、漢詩と五七五で、物語はすみへ敷入の寝るやひとりの親の側で終はる。老若ふたりの暫しの短い交流が描かれてゐる。蕪村は淀川であるが掲句は春の河とだけ。通ひ慣れたこの川を越えらともう母の家までわずか。ひとりでに足が速まる。「母の家」には父はもう居ないのだから。(喜孝)

行き先のないまま雪の降る五叉路 佐藤 恭子

五叉路で迷っているのではなく、徘徊してい

る人が見えてきました。淋しく、怖く、冷たさを感じるのですが、目をそむける事の出来ない
厳しい一句でした。(純子)

古雛変なにほひと男の子

七郎衛門 吉保

男女のどちらかと言えば、嗅覚は男子の方が
繊細かとおもいます。押入の匂いなのか、ナフ
タリンの匂いなのか。嗅いだ事のなく不快なも
のは、男子にとって、全部変なおいと言うく
くりになります。(純子)

ミキサー車の緩き回転春愁

篠田 純子

この句の意外性が良い。「春愁」といふ季語
の受け止め方は人それぞれ。深いうれひもあれ
ば、ふっと浮かび上がり流れてゆくうれひも春
愁である。作者は大きなコンクリートミキサー
車がセメントを入れた容器がゆっくり回転する

のを目にしている春のうれひである。ミキサー車
とだけでは首をひねるが、「緩き」で首を縦に
振らされた。(喜孝)

マッチ借る舷を寄せあひめかり舟

定梶 じょう

湿らせてしまったのか、使いきってしまった
のでしょうか。マッチをめぐり、舟同士が幅寄
せています。「なしたんけ？」能登の言葉も、
聞こえてきます。(純子)

だれもぬぬ朝の干潟へ忍び入る

定梶 じょう

句会ではよく無季ではないかと不安になり選
句中に歳時記を確かめることがある。何年経つ
ても季語の数の多さに圧倒される。といふ次第
でこの句も歳時記を開いた。なんとも心理の綾
を付いたおもしろい作品。「忍び入る」は別に
悪事を働こうとしてゐるのではない。ただ、無

人の干潟に入る時そんな気がしたのである。想像する及び腰がをかしい（喜孝）

単線や河津桜と菜の花と

須賀 敏子

オレンジ色の一両が、菜の花の中をはしります。河津桜も咲いていて、辺りは賑やかな色彩です。車輛の音と、カメラの連続シャッター音も聞こえています。

大振りの伊予柑届く兄病むも

須賀 敏子

「病むも」のものは「病んでゐるのだけれど」とは読まず、「病んでゐるのだなあ」と読みたい。遠く離れてゐても、いくつになつても兄妹愛の続くことに羨望を交えつつ読んだ。「大振り」がこの句をしつかり支へてゐる。（喜孝）

吉日を半ば信じる小鳥の巢

竹内 弘子

巣箱ではなく、小鳥が作りあげた巣とおもいました。巢の中には、まだ雛の動きは無いように、親鳥が抱卵しているのでしょうか。命が生まれようとしている小鳥の巢を発見して、「ラッキー！」と思わない人はいないと思いますが、作者は「一日が終わってみなければ、良い日かどうかわからないもの」と思いつつ、アルカイックスマイルを浮かべています。（純子）

畦焼いてその日の匂ひ妻にあり

中川 句寿夫

「あの日」ではなく「その日」の表現は何故かと気になりました。深読みかもしれませんが、作者と御妻女との、特別な日を思い出したのではないのでしょうか。囲炉裏端なのか、左義長を見ながらなのか、「その日」の匂いがフラッシュバックしたのではないのでしょうか。「その日」との表現が、句を上品に仕上げていると鑑賞い

たしました。(純子)

一帯はうすもいろにうつらけし

長崎 桂子

梅とか桜と言わずに、うすもいろとの表現。何処とも言わず、一帯と言っています。これらの表現が春のぼんやりした感じを、より強めています。気の遠くなるような、うららかさを感じた一句でした。(純子)

かぶりつくコロッケパンに春キャベツ

森 理和

かぶりつくの表現に、作者の健康的な食欲が見えます。調理パンには、柔らかな春キャベツが挟まっていて、作者は季節を感じます。たっぷりかかったソースの匂いもしてきます。

(純子)

櫻の芽や太き莖まろやかに苦し

赤座 典子

ジャンボサイズの櫻の芽を召し上がったようです。先ず莖の太さに驚き、食せばまろやかな苦味ありて旨し。規格外の櫻の芽への賛辞が、字余りの大胆さにより、読む人にストレートに伝わりました。(純子)

春来たり猫に品位を諭す人

秋川 泉

奇声、大声、蛩声を発しない！シャラップ！廊下を走らない！と、先生のとなり声。私の中学生の時を思い出しました。(純子)

惜春や月も中也の月となり

井上 石動

作者の心の中には、中也が住んでいて、春の月夜には、詩を誦んじて過ごしていらっしゃるのでしょうか。サロメが妖しく踊っている月夜です。(純子)

命続けと挑むノクターン春の日に

斎藤 裕子

港区役所のロビーコンサートのお客席で、一緒にオペラの一節を歌った事を思い出しました。「ウィーン生まれ」の所の裕子さんの声が、やはり綺麗で素敵でした。ロビーは寒かったのですが、歌い終わるとぽかぽかしてきて、幸せなひと時でした。

コーラスに生きている証を求め、日々を生きる姿に感動いたしました。(純子)

窓見上げ夫が手を振る花の許

斎藤 裕子

満開の桜の一樹がスポットライトのように明るくなっています。連理の枝、比翼の鳥と言いますが、仲の良いご夫婦が手を振りあつていらつしやいます。(純子)

散る桜ほら緑の葉出ているわ

斎藤 裕子

作者は、桜の小さな葉がもう出ていることに気づきます。葉は光合成をしてエネルギーを蓄えます。小さな葉にも心を寄せる、優しい作者なのです。(純子)

差し引いても幸せ勝る萼草

斎藤 裕子

病牀吟。萼草が裕子さんの人がらのやうだ。夏目漱石の「萼ほどな小さき人に生まれたし」を思ひ出した。(喜孝)

猫撫でて窓いつぱいの春日かな

斎藤 裕子

同じ物事を、表を見るのも裏を見るのも人の心。なかなか出来ぬことであるが、同じ見るなら表を見る。作者の前向きな姿勢に打たれる。

(喜孝)

みやあごみやごあんんと恋の猫 齊藤裕子

原稿どうりの表記である。「や」の大小を見事に使ひ分けて大いに参考になった。文語表記では大方「つ・「やゆよ」は使はない。わたしは定樞じようさんの指摘以後、使ひ分けてゐる。この句、その使ひ分けの妙である。(喜孝)

真心が届く手編みよ春の色 齊藤裕子

どんな物も、いや、物などには必要ないのだ。手編みの物はただの物ではなく真心なのだ。春の色なのだ。人の心で温もつてゐる作者。(喜孝)

咳き込めば猫駆けよりて我を見つむ 齊藤裕子

なんと可愛い猫なのだらう。目を見開いて何も言はずにジツと見つめてゐる猫、咳の辛さも少しは安らいだのだらうか。動物の癒し効果は

絶大だ。まして寢食を共にした犬や猫ならなおさらである。(喜孝)

入院の車で見上ぐ花の路 齊藤裕子

「緩和病棟入院」と題する一句目。昔日、知人を慶應病院から三鷹の病院へ転院するとき、自動車に同乗した。ちょうど桜が咲いてゐる時で横臥してゐる病人は眩しさうだったことを思ひ出した。この「見上ぐ」は通常の姿勢ではない「見上ぐ」かも知れぬ。「見上ぐ」一語に念ひを読み取る。(喜孝)

病棟より街を望めば花の河 齊藤裕子

俯瞰する街は花盛り。まさに花の河といふべき光景である、と裕子さんは云ふ。大景を絢爛と詠んでゐる。しかし上五「病棟」がこの光景を異次元へ暗転させる。(喜孝)

緩和病棟夫と静かな花のとき

齊藤裕子

楽しむことで返せばいいと子の助言

〃

この二句。読者をしばしほつとさせてくれる。

多言は無用、か。

自己と向き合ふ、自己の命と向き合ふことは辛いことである。辛いことではあるが本当は誰もがいつでも為ねばならぬ事であらう。裕子さんは俳句を通していつもそのことに心がけてゐる。命の源である父や母や夫、子供たちを中心に詠んでをられる。「楽しむことで返せばいい」と子供に云はれた。裕子さんは家族をおもふことが楽しいのだ。（喜孝）

散る桜ほら緑の葉出ているわ

齊藤裕子

桜の花が散っても桜は一時も休まない。染井

吉野の花の終はりを告げるやうに、枝にはもう緑の葉が噴き出してゐる。時の経つ速さを云ひつつも、生命の横溢した世界を口語を用い眩きのごとく表現された。不要とおもへる「緑」もこの句に必要なエネルギーを発してゐる。

（喜孝）

傘まはしをさなご通ふ花の路

裕子

迎への母に走るてふてふ

喜孝



葉降る

陰暦五月五日を葉日といひ、この日午に雨の降ることをいふ。この雨が降れば急ぎ竹を伐る。竹の中には必ず水がある。これを神水と云ひ獺の肝と混ぜ丸薬にしたとある。この雨を「葉降る」といふ。

大仏を出で来し人に葉降る

鎌倉喜久恵

この俳句の大仏さんは鎌倉の大仏さん。胎内を拝観して出てきたら雨が降つてゐる。ただの雨でなく「葉降る」といへば何か佳いことに巡り会へるかもしれないといふ気になる。この雨は五穀豊穡の兆しとあるが、『年浪集』には「今日雨降れば、すなはち来年大いに熟す」とある。気の長い話である。

「葉の日」・「葉降る」は『あを』ではこの一句しか発表されてゐない。喜久恵さんがお亡くなりになられ、親友の典子さんと吉保さんがお部屋を

六月の季語

訪ねたら様々な歳時記が置かれてあつたさうだ。このやうな難しい季語におもしろがつて挑戦されたのであらう。

青蛙

蛙はやっかいな季語である。季節もややこしい。『滑稽雑談』に「青蛙、句作によつて春になり、春にならざる儀あり。古人の夏に作り、秋に作られた句などはべり。作者心得べし」とある。呼び方も「かはづ」と云ひ「かえる」とも云ふ。

いつせいに田より跳び出す青蛙 早崎泰江

蛙は古より人の傍にゐて愛されてきた。鳥獣戯画では大活躍。この句も蛙が生動してゐる。何のきつかけであつたのだらう。田にゐる蛙が皆跳びだしてきたやうに思えるほど、沢山の蛙が跳びだした。吃驚したことであらう。デズニールンドもよいがこの景の方に行きたいものだ。

(喜孝記)



比来披見

ホトトギス 五月号

茅花ゆれ記憶の道にふみ入りし

稲畑 汀子

魂鎮め闇を深めて烏賊火燃ゆ

稲畑 廣太郎

沖 五月号

太刀魚の春愁といふ立ち姿

能村 研三

雨月 五月号

幼児の転べばそこに犬ふぐり

大橋 暁

槐 五月号

よく笑ふ人はよく泣く桃の花

高橋 将夫

馬酔木 五月号

磐座に届く夕日や稲浸し

徳田 千鶴子

風土 五月号

地にまこと天に泰山木咲けり

神蔵 器

京鹿子 五月号

水仙忌星の標は一つとす

鈴鹿 呂仁

六花 五月号

竜天に登りたる日のうねり橋

山田 六甲



鳴 五月号

夜櫻のゆらゆら波を踏むやうな

井上 信子

あたたかねと二階から声落ちてくる

高橋 道子

空 六六号

赤ん坊が胸に張りつく夕ざくら

柴田 佐知子

万象 五月号

底抜けの青空に浮く紅椿

大坪 景章

春燈 五月号

梅一輪茶毘のけむりを仰ぐかに

安立 公彦

峰 五月号

汚染の世復興の世の桜の世

布川 直幸

末黒野 五月号

ままならぬ足の運びや揚雲雀

小川 玉泉

流るると見えぬ街川春の鴨

松本 三千夫

やぶれ傘 八九号

花なづな踏切わたりすぐに駅

大崎 紀夫

比来披見

雲の峰 五月号

暖かや祖母に供ふるクレヨン画

朝妻 力

萱 五月号

止まりては跳びては鳴ける石叩

木村 嘉男

春よ来い蟻も出て来い友よ来い

亀田虎童子

囀りや窓が大きくなりけり

小島 良子

霽 五月号

桜前線北上活断層軋み

松林 尚志

霊園のとぼしき土に春の霜

藤田 宏

集 五九号

坪庭に残すかりんの実を一つ

大山 夏子

朝 五月号

くたびれてさみしくなりぬ葱の花

岡本 眸

ヤツとオレ

バラの名はマチルダ君の名は山田さん

坪内 稔典

裏山の夏の気集め母の家

赤錆の錨ごろんと父の家

梅雨明けの犀も駝鳥も前かがみ



梅三分男はやはり背中だよ

肩に來たこの天道虫は原田君

カバの目の漆黒が澄む水が澄む

草の芽も木の芽も君も僕も今

文旦とカバは親戚ねんてんも

青空に雲ひとつなし余り苗

この榎植ピカソが中で寝ているよ

水脱いで春の真昼の河馬二トン

びわ食べて君とつるりんしたいなあ

天河から戻ったばかりかたつむり

弟は屈強の他者ギンヤンマ

伊予柑は指立ててむく愛もまた

日本に憲法九条草芽ぐむ

戦争のない七十年あつ、なずな

東風吹いて日本は戦争放棄国

ヤツとオレ日本董学会員

(喜孝抄)

最初の記憶

本文を書き始めるにあたって、2008年7月に刊行されている「最初の記憶と俳句集」を手にとった。ざっと目を通してはいるが、大半の方々の最初の記憶は早くても3歳ごろであった。かくいう私も3歳時の記憶らしいことが二つある。

東京の空襲が激しくなり、母親と二歳上の兄と生まれたばかりの妹と一緒に、母親の実家筋にあたる山梨県北巨摩郡日下部町小原西（現在の山梨市）に疎開した。



保吉門衛郎七

そこは大地主の旧家で、広い庭から養蚕用に建造された3階建ての、広い縁側の続く家屋敷を見上げていた記憶がある。

もう一つは、自分ではその日が終戦日と思い込んでいる記憶である。何故かその時は疎開から戻り、新宿区下落合にあった自宅の庭から空を見上げていた。その空の色は今の東京では絶対に見ることのできない真っ青である。その空高くB29が反射光を煌めかせて過ぎ去っていく。その空を父親が2階の手すりに手を添えて見上げ「戦争は終わったぞ」と、記憶はここで終わる。

この二つはストーリー性の少ない静止画に近い。記憶の信憑性を裏付ける動きが極めて少ない。そこで、時間と空間が動き物語性のある記憶、すなわち動画になる最初の記憶を書くことにする。それは昭和24年(1949年)の2月から3月頃である。

自宅から直線距離で200mほどの所にキリスト教系の聖母病院があった。新宿区もご多分に漏れずその大半を焼失したが、この病院を囲む1キロメートル四方区は焼夷弾の難から逃れ屋敷町として残っていた。

向こう五軒両隣には、後に侍従長になった徳川さん、東大総長南原茂さん、A級戦犯星野直樹さん、クラシック作曲家平尾昌晃の伯父さん、銀座ワシントン靴店社長東條さんなどのお屋敷があった。借家ではあったが100坪ほどの庭と50坪ほどの家に、当時としては割と恵まれた生活をしていた。

4月に新宿区立落合第一小学校への入学を迎えるにあたって、母親と入学用品一式を買うために、新宿にあった三越に出かけた。高台にある自宅から西坂を下り、西武線下落合駅の横にあるバス停に向かう。そこは広大な東京都下水処理場の手前にあり、焼け野原と相まって5、6階建て鼠色で上部に丸に越のマークのあるデパートがバス停から見通せた。木炭バスかガソリンバスか覚えてないが、バスの停留所は三越前であった。

日本全体が物不足状態の中ではあったが、デパートには一通りの品揃えがしてあったのではないだろうか。すごく混み合っていたことを覚えている。スフの服上下揃い、布とボール紙と板でできたランドセル、布とゴムでできた靴、鉛筆箱、四角棒状の12色クレヨンなどを買ってもらった。

小学校入学時集合写真の、最前列の生徒たちの半分ほどが下駄履きの世相にあつて、相当な暮らしをしていたことが伺える。がピークはここまでであった。

素材の品質が悪く、例えばクレヨンは一体作りではなく、先頭に四角錐状のクレヨンが糊付けされているようなもので、すぐ欠け落ちてしまったり、ランドセルも靴も1年も持たなかったのではないだろうか。我が家の生活レベルも、物の品質に合わせたかのように見る見る下がっていった。結核を患っていた父親の病状が悪化し、自宅療養となり収入の道が途絶えてしまったのである。

生活の糧として、応接間にあった絵画や飾り物などが次々と無くなっていき、質屋で着物や帯を処分する母親に同行した覚えもある。間もなく半分以上の部屋に下宿人を置き、親子6人が何とか暮らせるような状態だった。日本全体が豊かでなかった時代だったので、それほど苦にはしてなかったように思うが、「もし父親が病気でなかったら、入学時のあの豊かな生活が続いたのでは」という片思いは子供ながらも続いていた。

結婚して50年になるパートナーからは「あなたの価値観とか指向性は、それ以来変わっていないかもしれませんよ」と言われたことがある。もしかすると最初の記憶は一生を左右するのかもしれない。

今日は2016年4月2日、偶然にも初孫君の三歳の誕生日である。君はどんな最初の記憶を持つのだろうか。祖父の「最初の記憶」を君に送ろう。



俳境流連

うつすらと眼鏡のくもる穀雨かな 幸江

私が俳句を始めて気付いたのは、日本の言葉の多彩なことだ。雨も雪も時季ごとに言葉がありそして美しい。穀雨は穀物にとって大事な雨、今年の秋の実りを約束してくれる。雨が降れば湿っぽくなる。日本人は眼鏡を使う人が多いそうだ。子供から老人まで湿度の高い日は「やれやれ」だ。きつとハリポッターも「やれやれ」組だろう。

そんな理由で風呂場の湿気で曇った眼鏡を拭いている今出来た句でした。

おほいなる蓋あるごとし霾ふれり 桂子

テレビやラジオで西日本、特に九州地方に黄砂がやってきた、とのニュースが流れてから二日か三日すると我家の周辺の様子も少しばかり変化します。

朝から曇りでは無いのですが、太陽の光もぼんやりと感じ、光が何かで遮断されているような、それは、もどかしくてじれったい気持で、木製とかアルミニウムの蓋ではなくて、薄い布の紗とか、夏の蚊帳のような物で閉ざされているような、息苦しさを少々感じました。

そして翌日か翌々日には、ざらざらした砂埃が、葉っぱや屋根瓦に、うすい土色で残っていました。

柿若葉あんぱん買って祖母の家

理和

祖母の家へ遊びに行くと、祖母は農家の広い広い庭の真ん中にゴザを広げて、縄や俵を編んでいた。いつもなので目に焼き付いている。「よう来たなあ」と、満面の笑顔で迎えてくれた。次は必ず「東京者が、あじょんしてハイヤーで来んか。次に、「東京者があじょんして、良い服を着て来んね」「よそ行きだよ」と答える。赤やピンクの明るい色を考えているようだった。

鶏の一羽に縦長のザルが掛けられる。餅米蒸される。丸餅作りを手伝っても、祖母の丸餅の様にはいかない。あんこ、黄粉、大根下ろしが用意される。その手早さに驚く。

夏には飼っている蜜蜂の蜜を井戸水で蜂蜜水が。

靴を脱ぐ前にコップ一杯を飲む。秋にはらよっ

と黒味の干し柿、丁寧に巻かれた辛い辛い葉唐辛子、茄子や大根の漬け物、芋茎の味噌汁。子供の頃はたべづらかった。今だったらどんなに美味か。母は七人中たった一人の娘、そしてその孫。帰りには、小さくたたんだ五百円札を「誰にも言うんじゃないよ」と、私の手に握らせてくれた。

祖母が上京すると、必ず鋤焼を囲んだ。「豚肉だぞ」と、祖父が私にお金を渡す、玄関で兄が耳うちする「牛肉だぞ」。

「これが豚肉だよね」と兄。「豚と牛の違いくらい分かる」と、祖父。旨い旨いと私達兄妹は、鋤焼をたいらげた。

祖父が七十四歳、祖母は百歳の天命でした。

波ひとつ動きだしたる加留多かな 恭子

子供の頃よく遊んだものに陣取り、かくれんぼ等物がないときだったので道具のいらない遊びだった。隠れる場所が一緒になったときなど、どっちかが譲らなければならぬ。今思ひ出すと、本当に真剣勝負だった。物が無くとも遊びは出来るものだと振り返るとなんとなく楽しい。

子供の小さかった時、神経衰弱のトランプ遊びが好きでよくやっていた。最初は優位に立っていたのがいつの間にか追い込まれている事に気付く。その時にはもう遅い。トランプも加留多も負けこむと早い。波の動き出すタイミングをしつかり身に覚えて、大事に過ごせたらと。後悔先に立たずと言われない様に！

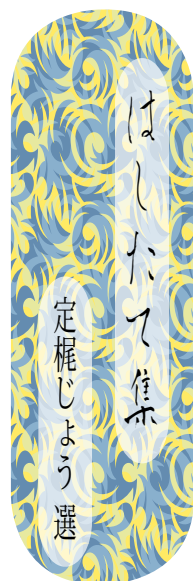
昨日もハタキを持ってエイヤアと遊んだ、孫の方が強かった。残念

ホームレスの凭る大樹囀れる 幸江

今年も囀の季節がやって来た。中央公園には小鳥たちが囀としてゐる析の木がある。雀を除いた小鳥たちの生活の木だ。夜は日暮と同時に静かになる。

少し前その大樹の根元にダンボールやビニールシートが置かれていた。誰が寝泊まりしているのだろうか。

その日は静かで心地よい風も吹いていた。風に誘われ公園に行った。「オヤ」大樹の根元のダンボールの上に人が居た。目を閉じ小鳥の囀を楽しんでいる。私はブランコに乗りその人の様子を見ていた。若くもなく老人でもない。ジョンレノン風に髪を束ねている。風が冷たくなってきた。その人はゆつくりと、ダンボールを小脇の挟み去って行く。主役は彼だった。



森 直子

夜桜に風の出てゐる能舞台
篝火にひっきりなしの落花かな
町騒のいつしか消えて薪能
たんぽぽの踏みしだかれて花の後
チューリップ絵本のやうに咲いてをり

おハガキの中で、写生に終つてしまう句が多い、と嘆いていらつしやる。自分を出せる句、そんな句を作りた
い、とも。「写生に終る」とは「ただごと俳句」を指す
のでしようが、佳句秀句の殆んどは「ただごと」とすれ
すれの処で成り立っていることが多いと思うのです。波

多野爽波に

鳥の巣に鳥が入ってゆくところ

があります。だから何うしたんだ、と或る系統の結杜同
人が言ったことがあります。が、「写生に終つてしまう」
ことを覚悟の上で作句する、そして句の形の上で「感じ
たことを見たもの」に移しかえる、それが、自分を出す
方法の一つ、ということではないでしょうか。

冬霞盃ほどの富士の影

この句の「盃ほどの」が「感じたことを見たもの」に
移しかえた結果出てきた措辞。

と言って、いつもそんなことを考えて句を作つてい
ては疲れます。素直に見て素直に表現する、それで宜しい
と思うのです。但し、突つ込みが足りないかな、と感じ
たら、〈篝火のひっきりなしの落花かな〉、咲いてをり
絵本のようにチューリップ等、一手を入れることをし
てもいい。

いずれにせよ素直さに優る才はないのです。

田中藤穂

沐浴のごとく落花を浴びて佇つ
靴底の落花の厚み雨上る
花冷や御飯へ落とす生玉子
望郷の歌声に和す夕蛙
葉桜や家壊す音響くなり

五句とも間然する処がない、と言つていいのですが、意地悪く粗を探します。〈沐浴のごとし、〉と切る方法がありますし、〈靴底に落花の厚み…〉とするとめりはりが出る。〈望郷の歌声に和し〉と連用形で止めた方が結句「夕がはづ」のウ音に響きが重ならない、等々。

なお、三句め〈花冷や御飯へ落とす生玉子〉。いろいろやつてみたが上手にまとまらない、と仰有つてゐる。このままの形で上々。あつあつの御飯へ卵を落とす。暖かくないような寒くないような「花冷」の季感によくあつてゐるのです。

佐藤恭子

幾重にも水におきたる糸柳
口先の水をひろげし鹹かな
袋路に小指きらさる花の道
母後のなみだの糸と春の雨
片棒をかつぐをとこや花筏

一句め。「水におきたる」は柳の影なんでしょうか。「影」といわないでそれを感じさせた。

三句め。「小指きらさる」は、昔の遊女などが誠意の証しとして小指を切つたという、そのことでしょうか。「袋路」と言い「花の夜」と置いた措辞からそう解釈したのですが。

四句め。「なみだの糸」。遺された母上。

五句め。「片棒をかつぐをとこや」に取りあわせるに「花筏」。全句に恭子さんの江戸趣味（いい意味で遣つてます）が窺われるのです。

長崎桂子

無人駅花壇整ひ長閑なり

佳句です。花壇には人を見ないのに整っている。だからのどかなのでしょうか。

春埃籠りがちなり色鉛筆

この句に欠点があるとしたら、「春埃」で切りたいのに「籠りがちなり」に接続してしまいそうなところ、でしょうか。上手な披講者なら上五ではつきり切つて「籠りがちなり色鉛筆」と読み上げるでしょう。しかしこの句に手を入れてはいけません。「籠りがちなり色鉛筆」。色鉛筆を独立して置いた処に宜しきがあるのですから。

花三分人は屯し大聲を
花見上ぐ空青き故事も無く
無人駅花壇整ひ長閑なり
春埃籠りがちなり色鉛筆
春雨の風を押さへる安堵かな

花三分人は屯し大聲を

結句「大聲を」が落着かない。

屯して人の大聲花三分

「大聲」に配するに花はまだ固いのです。

花見上ぐ空青き故事も無く

「見上ぐ」。句歌では概ね「あふぐ」とする方が適います。中七以下も「青い」「無い」の形容詞の重なりがやはり落ちつかない。

花仰ぐ空の青さのこともなく

春雨の風を押さへる安堵かな

「風を押さへる」が面白くない。確かに雨が風を抑えるのは事実ですが、句のことばとしていかがなものか。

春雨に風止んでゐる安堵かな

素直に言つたほうが「安堵かな」の語が生きて

思う。

黒澤佳子

玉葱の揺さ振り抜くや鬚根に土
採りたての露の剥く灰汁もなし
花まつり抱き上げ稚児の靴覗く
風誘ふ桜も吾も吹かれけり
ジーパンは髑髏柄なりテント張る

玉葱の揺さ振り抜くや鬚根に土

「玉葱の髪根の上」の事実の措辞のあいだに「揺さ振り抜く」の動きの語を挿入した形。二重構造といってもいい。当たりまえの内容を俳句の形が面白くしたのです。

採りたての露の剥く灰汁もなし

生鮮ならあぐもすくないのです。

風誘ふ桜も吾も吹かれけり

花が風を誘ったわけで、その風に自分も吹かれた、と。ですから、桜も吹かれた、ではおかしいわけです。

風誘ふ桜や吾も吹かれけり

赤座典子

のどけしや話途切れぬ露天風呂
強風に五分の桜の耐へてをり
川柳美し貸切りの遊覧船
花見馬車足取り軽く南部駒

のどけしや話途切れぬ露天風呂

岩手県北上市にお嬢様と二人旅なさった時の句だそうですが、話が途切れない、のは面白くない。

のどけしや話途切れて露天風呂

川柳美し貸切りの遊覧船

句歌には、美しい、などの語はよほどのことのない限り遣わぬ方が。

貸切りの遊覧船の川柳

因みに、「遊覧船の川柳」のような附け方を私はよくするのですが、抵抗を感じるかたがあつて当然、とも思います。

花見馬車足取り軽く南部駒

「足取り」と言つたら軽く、重く。いずれにしろ常套のことばです。

花見馬車の足取り南部駒なりけり

なお、現代の俳人はこんな場合、「駒なりし」とします。「し」はもともと、過去に経験したことを今もはつきり記憶している、という時にのみ遣つたそうですが、俳諧の始まつた頃には時間に関りなく遣われました。従つて、「南部駒なりし」としても可、と思います。

須賀敏子

さらさらと風は気ままに花を掃く

花了る飛行機雲の長いこと

貰ひ火の家の庭にも糸桜
老桜を選びゆるりと二人かな

さらさらと風は気ままに花を掃く

詩文の一こまとしての表現なら可とすべきでしょうが、俳句では「さらさらと」「気まま」が並ぶのは不可、と思います。

風が掃くことの気ままに落花かな

花了る飛行機雲の長いこと

秀句です。「花了る」と「飛行機雲の長いこと」の間に何の脈絡もないわけですけど、こう言われてみれば、今日の飛行雲の長いのはなるほど花が了つたからなのだな、と納得せざるを得ない。

貰ひ火の家の庭にも糸桜

よその庭にもあるが、この家の庭にも糸桜が咲い

ている。中七「家の庭にも」はそういう言外の意を含んだ「も」。こういう「も」を正岡子規は「嫌味の『も』である」と喝破したのでした。

貰ひ火の此の家の庭に糸桜

森 理和

路線バス薨に朝日桃の花
お花見は上野の山の鶯亭
水平線大島すつぽり春霞
葉桜に大賑はひの人出あり
大島や水平線の春霞

路線バス薨に朝日桃の花

早朝のバスからの、懐かしく慕わしい景。

お花見は上野の山の鶯亭

花見は鶯亭でした、あるいはすべき、ということなのでしたが、場所と花見を離して表現した方が俳句らしくなります。

上野の山に鶯亭ある花見かな

字余りが気になりますか。

水平線大島すつぽり春霞

「すつぽり」は品詞分解的には副詞ということになりますが、要するに擬態語。オノマトペの使用は俳句では嫌われる傾向にあります。遣わないですむならその方が。

秋川 泉

入院の前にステーク四月馬鹿
無住寺に鎮まる姿山桜
春雨や歩をゆるませて関帝廟
活断層一直線に春を切る

活断層一直線に春を切る

泉さんは大分、福岡に親戚がいらっして、それでこの句ができた、と書いていらっしやる。その上で、気持ばかりが先走って人には分らぬ句なのでは、と

心配していらつしやいます。

結論から言えば、そんなことは一切ありません。身内が現場に居住しているからこそこんな強い句が出来た。そう思ふべきです。九州から遠く住まつて地震がひとごととの私に、「春を切る」などのことが思い浮かぶことあり得ません。「春を切る」がこの句の命なのです。ただ一つ、弱い処がある、とせば「一直線に」でしょうか。説明くさくなつてしまふのです。破調になつても

一直線の活断層が春を切る
としたい。

大日向幸江

椎若葉輝き放つ宮詣り
大望があるらし蛇の穴出づる
オブラートに包む葉や聖五月
土曜日の少年綿毛となりにつり

椎若葉輝き放つ宮詣り
俳句は形、といいます。

詣でけり輝き放つ椎若葉

大望があるらし蛇の穴出づる

「らし」と推しはかるのも悪くないのですが、

大望があるので蛇の穴出づる

と断定した方がおもしろくなりそう。

土曜日の少年綿毛となりにつり

「土曜日」がよく効いています。その少年が「綿毛になる」という飛躍もよくわかります。土曜日にわくわくしている少年。でも、「大望の……」の句とは逆に今度は断定しないで、「なりたい」としたい。その時、「綿毛」では纏りが悪くなりますので

土曜日の少年たんばばになりたく

さきの句で推量を断定に、この句では断定を願望に変えの、決して身勝手から、ではないこと、分つていただける、と思うのですが。

七郎衛用吉保

舞ふ花を追ふつばくめ高みかな
雑草や隙間の春を埋め尽す
田に畦に八千草育む雪解水
祖母の手のかたちいろいろ草の餅

舞ふ花を追ふつばくめ高みかな

あたかも燕が反転するように、坐五に「高みかな」
が置かれている。この意外さが心地よいのです。

田に畦に八千草育む雪解水

「田に畦に」が常套。句柄を大きくして

田に牧に千草育む雪解水

雪解水は川つぶぢばかりを潤すわけではないので
す。

祖母の手のかたちいろいろ草の餅

「手のかたち」があいまい。

祖母がまるめてかたちいろいろ草の餅

渡辺京子

ロータリイこんもり花に埋れ居り
真似っこをしてくれる児や桃の花
話しても真意通ぜず木瓜の花
新緑の山もつくりと虎刈りに

真似っこをしてくれる児や桃の花

話しても真意通ぜず木瓜の花

この二句の取り合わせ方が手慣れています。しかし
例えば、「真似っこ」は「鍵っこ」「いぢめっこ」
等のように子供を意味しますから、中七終りの「児
や」とつばらう工夫をしてもいい。とりあえず

真似っこをしてくれてけり桃の花

などと。句中、休止する処があればなお宜し。

新緑の山がもつくり虎刈りに

「虎刈り」が作者の実感。

中川句寿夫

これほどに鉦の刃毀れ竹の秋
鳥の巢一円玉を拾ひけり
下寺へ貫はれてゆく仔猫かな
麦笛や目んない千鳥ばかり吹く
落慶や過分な寄付の鮑海女

これほどに鉦の刃毀れ竹の秋

筍を育むために春は親竹が黄ばんでくる。竹の秋。
水分が子にとられるために幹が固い。鉦も刃毀れる
のです。

下寺へ貫はれてゆく仔猫かな

本坊からもらわれてくる仔猫。それを「下寺へ貫
はれてゆく」と本坊の視線から表現。しかし「下寺
へ貫はれてくる」としたほうが直接的で分りいい、
とも思うのですが。

落慶や過分な寄付の鮑海女

俳句では「若布海女」「鮑海女」など、少し無理
と思える言い方でも遣います。

季語「海女」ある歳時記では掲載収録がなく、あ
る歳時記では夏とし、他の歳時記では春、とする。
そして鮑も季が春であったり夏であったり。『俳句
歳時記』が百科事典ではないことに改めて思い至る
のです。

佐藤喜孝

父の家絹糸草に鷺を挿し
納豆の糸をふやして春ハヤチ
あやつりの糸は見ぬもの呼子鳥
老人のぺたんぺたん花の上
鉄棒の下に禿げたる春の土

父の家絹糸草に鷺を挿し

「鷺を挿し」。「鷺草」のことでしょうか。しかし
「鷺草」を「鷺」と省略すること、あるのでしょうか。

です。

納豆の糸をふやして春鷹

「糸をふやして」が独特。人には真似しがたい言いようなのです。取り合わせるに春はやて。これも喜孝流。塗箸より割箸の方がよく練ることができる、といえます。「糸をふやす」のです。納豆を練るときはだれでもが無心。外は春荒れ。

あやつりの糸は見ぬもの呼子鳥

「見えないもの」ではなく「見ぬもの」だということ。ここら優しい作者は、見えるけれども見ないのです。手品奇術のネタがひとり解つても黙つて見ているに相違ありません。近くの森では「これはこれは」と言わんばかりに筒鳥が。

老人のぺたんぺたん花の上

「花の上」とあります。「草の花」と理解したいの

ですが、当季ではなくなる。けれども、「ぺたんぺたん」が面白い分だけでも「草の花」であつてほしい。

鉄棒の下に禿げたる春の土

ぶらんこの下なら扱られるが、鉄棒だからその下は禿げるだけ。春の土だけにそれが可笑しくかつ哀れなのです。



湖底

湖底の森乾きて梅雨の蝶生る
湖底からひびく声あり散り紅葉
流木の湖底の色へ小鳥来る

古典

鳥瓜古典文学に垂る

個展

初しぐれ個展の葉書とどきけり
葉桜や個展の知らせ恩師から

事

事もなく一人歩きや秋の月
事の果ゆだねてをりし春北風
朝寒や解せぬ事ある渋茶かな
戦はぬ事主張せよバレンタイン
春の海瀬戸の小島に住みし事
小鳥来るうれしき事の一つ増え
良き事で埋めてゆきたし初暦
きさらぎや金の力で出来る事
内々に済ませたき事つばくらめ
数うれば良き事もあり茄子の花
数へ日に晴たる事や捗りて

琴

春の夜の外せば妖し琴の爪
幼子の琴が奏でるチューリップ

古都

古都の春タクシーを待つ列つづく
「五山」てふ地酒もありぬ古都の秋

孤島

九条や孤島の鳥は飛ばぬと決め
孤島に立つ白き灯台石路の花
公園孤島驟雨愉しき杉楓

ことごとく

ことごとく若死たりし目高かな
悉く土に還りぬ草いきれ

今年

雪囲今年も同じ形なり
盛りなく今年の夏は果てにけり
三浦より今年もどつと紅大根
盆踊今年も二人見る阿呆
この家や今年も軒に唐辛子
今年また雀きてをり鬼の豆
立冬や今年も日記白いまま

木村茂登子
山莊 慶子

長崎 桂子

森山のりこ

佐藤 喜孝

須賀 敏子

堀内 一郎

佐藤 喜孝

篠田 純子

渡辺 京子

山莊 慶子

赤座 典子

齊藤 裕子

田中 藤穂

長崎 桂子

芝 尚子

毎月25日発売 定価1200円(税込) 月刊 **俳句界** 2016年7月号

〈特集〉 **阿久悠の詩の世界**
 ○阿久悠歌詞の名作掲載
 「もしもピアノが弾けたなら」「北の螢」「北の宿から」「雨の暮情」「青春時代」「津軽海峡冬景色」「H.O」「勝手にしやがれ」「時の過ぎゆくまは」「船き心」「ヤマトより愛をこめて」「ロマン」「また逢う日まで」
 ○エッセイ「阿久悠との思い出」
 川中美幸（歌手） 三田完（作家）

私の一冊スペシャル
 富士真奈美（女優） 金原瑞人（翻訳家）
 安井浩司 大輪靖宏 池田澄子
 宇多喜代子 齋藤慎爾

ラッパ **俳句界NOW** 松本三千夫
 特別作品50句 青柳志解樹
 21句 今瀬剛一 井上康明 関森勝夫
 氷セクション結社「くぐら」 中尾公彦

私の一冊 **辻美智子「牡丹」**
 佐高信の甘口「ソニチハ」！
 木村草太（首都大学東京教授）

別冊 **投稿俳句界** 一流読者20名！
 日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。
 株式会社 **文学の森** 要求めは ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
 TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

あとがき

○ 齊藤裕子さんが五月二三日に逝去なされました。あをに残された大きなものがありました。三月二十九日、四月十日と息もつかせずに特作が送られてきました。

御夫君から六月号までは「あを」を読むことは無理ではないかとお聞きし、純子さんと鑑賞文をすぐに仕上げて裕子さんに読んでいただきました。合掌。

○ 作者名に地名があった方が……と会員の方から提案がありました。提案を機に『作品』のレイアウトを変更させていただきました。

○ 江倉京子さんが渡辺京子さんに改名されました。
 （喜孝）

二〇一六年六月号

発行日 六月八日
 発行所 東京都中野区中央2-50-3
 電話 090-9828-4244
 ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト カット／松村美智子・ティリ エイマ 竹僊房

郵便振替 00130655526（あを発行所）
 会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年
 表紙・佐藤喜孝
 乱丁・落丁お取替えします。

